

初代五姓田芳柳画「新潟萬代橋図」について

大森 慎子

「新潟萬代橋図」の作者、初代五姓田芳柳〔文政十(一八二七)～明治二十五年(一八九二)〕は、明治時代の幕開けとともに開港場横浜や浅草を中心に活躍した画家です。西洋画を見て衝撃を受け、「横浜絵」「写真画」「隈絵」と呼ばれた絹地に彩色し「西洋絵画のよいうな陰影をつける方法を独自に編み出しました。息子の義松には本格的な西洋画を修めさせ、五姓田派と称される一派を成しました。近年、神奈川県立歴史博物館を中心に五姓田派の研究が進められ、昨年「五姓田のすべて―近代絵画への架け橋―」展が開催されました。この展覧会で新潟に関する作品の多さが特筆されています。

明治十九(一八八六)年十一月に完成した初代萬代橋を描いたこの絵は、新潟に関する代表作のひとつです。しかし初代芳柳作品の中では特異な一点といえます。写真に元を描いていますが、元の写真には人影はわずかです。写真に写る人に脚色を加え、人や馬や船が描き加えられています。人々には正装させて祝祭的な雰囲気を出しています。肖像画や美人画作品に見られる西洋画のようなりアリエイの追求は見られず、個性を付けつつも一様にやや丸顔の人物は立居姿に固さがあり、やや大仰なポーズは演劇的一幕を見ているようです。落款が無ければ初代芳柳の作品とは考え難いほどです。

彼の風俗画的な作品は、この他に郡山市立美術館所蔵の「風俗図屏風」(制作年不詳)があります。紙に水彩で描かれ、萬代橋図とも大分イメージが異なる作品ですが、丸顔の人物、人力車や盲目の人等描かれた人物の内容に共通点が見られます。丸顔の人物は、息子義松や娘幽香の作品にも見られます。義松の西洋画の師チャールズ・ワグマンはデッサンで市井の人々を丸顔に描くことが多いので、芳柳は市井の人々を描く時に、これをイメージして描いたのかもしれない。なぜ、この絵は萬代橋完成後、数年の時を経て明治二十一年に描かれたのでしょうか。

この絵の注文主は、当時第四銀行頭取の八木朋直です。八木は、元米沢藩士で、新潟県の役人を経て第四国立銀行の設立・経営に尽力しました。後に市会議員や市長もつとめ、当時の新潟を代表する政財界人の一人です。八木は萬代橋架橋事業に私財を投じて資金援助しました。八木はこの功績への思いが深く、晩年狂歌を詠む際に架橋翁と号していました。

芳柳は、明治十八、十九年には新潟や近郊で肖像画を多く描いています。二十年五月には八木と夫人の肖像を描いています。萬代橋の完成を祝してこの萬代橋図が描かれたならば、もっと早く描かれていても良い気がします。気になるのは画中に描かれた

橋名板です。これは、初代萬代橋に実際につけられ、明治三十三年に取り外されて現存する鋳物の橋名板と酷似しています。橋名板の元になった柳原前光の書には「応八木内山両氏属」と書かれています。しかし、現存の橋名板は鑄造後に二部切り取られて詰めた跡があり、「応八木氏属」とあります。

初代萬代橋の施工費は素材の変更や金利の変動などで予算をはるかに上回り、架橋を計画請願した内山信太郎は、竣工後すぐに所有権の半分を八木の名義にしました。その後も橋詰から沼垂の町までの道の整備がされないために橋の利用は少なく、橋銭の収入が上がらず、借金返済の目処が立たなくなつた内山は、結局明治二十二年五月に萬代橋の権利を全て八木に譲ります。内山の名をはずした橋名板が描かれているこの絵は、内山の全権譲渡を予告しているかのようです。

八木の萬代橋に対する思いが、絵の



「新潟萬代橋図」(網本着色 明治21年 当館所蔵) 部分拡大



作品のもととなった写真

中だけでも自分の独占物として描かせたのでしょうか。明治二十一年に描かせたことには何か思惑があつての事でしょうか。ちなみに絵の元となった写真には、この橋名板ではなく木札の橋名板が写っています。四月二十五日から開催予定の「(仮称)五姓田 GOSEDA―明治新潟の人々を描いた絵師」展では、この「新潟萬代橋図」のほかに五姓田派の新潟市内県内に関わる作品を紹介します。五姓田派と新潟との関係には、ほかにもまだ多くの謎が潜んでいます。みなさんも推理してお楽しみください。(おもしろい しんこ 学芸員)

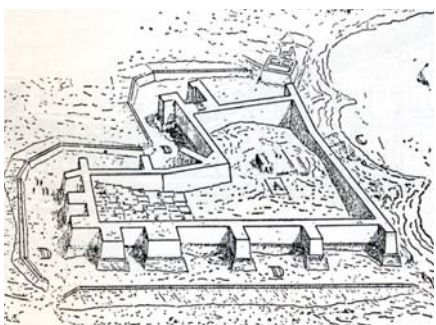
古代エジプトと日本(二)

屋形さんによれば、エジプトのヌビア支配はおおよそ次のように段階的に展開しました。

古王国時代には、ヌビアに接する南端の州の長官が、エジプト化したヌビア人を通訳として、第二急湍と第三急湍の間の下ヌビアに遠征し、ヌビアと交易をしてエジプト王に莫大な富をもたらした。エジプトは下ヌビアの北と南の要衝に最初の要塞都市を置いたが、まだ明確な辺境支配の意識はなく、要塞都市は金を円滑に運ぶための拠点にすぎなかった。長官の遠征隊は交易品とともに最大二万七〇〇〇人に達するヌビア人を連れて来ている。エジプトには職業的な軍人はおらず農閑期の農民を兵士としていたので、ヌビア人傭兵はエジプトの重要な戦力であった。

第一八王朝は、西アジアとヌビアに先制防禦的な二正面作戦を展開し、軍事大國化する。そのリアクションとしてヌビアの反乱が激化するが、歴代エジプト王の親征により反乱は鎮圧された。エジプトは上ヌビアの第四急湍までを併合し、最大版図となる。ヌビアには、エジプトの首都テーベの太陽神であるアメンラーを祭る神殿都市が建設され、信仰面からもエジプト化が急速に進んだ。

末期王朝時代には、上ヌビアのナバタに土着の王国が出現した。この王国は、エジプトでは衰退したアメンラー信仰の復興を旗印に北上して逆征服を果たし、テーベを首都として第五王朝を作った。奥州平泉の藤原氏が天下を取ったような話で、歴史の面白さを感じられます。(あまかす けん 館長)



セムナの要塞(復元図) 第12王朝 (『世界考古学大系』第13巻、平凡社、1960)

収蔵資料紹介

蓄音器(三光堂グラフォフォン)

写真の蓄音器は、三光堂という日本のメーカーが大正三(一九一四)年ごろに製造販売していたものです。新潟市内の商店が使用していました。個人で楽しむほかに、来店者を楽ませたり、客引きに利用したかもしれません。

この蓄音器の動力はゼンマイです。右側面のハンドルを回し、ゼンマイを巻きます。レコードをターンテーブルの上のコードの溝から針が振動を受けます。サウンドボックスという針の上部にある丸い部分がその振動を増幅し音にして再生する、という仕組みになっています。

レコードを使う平円盤式の蓄音器には、写真のような形のほかに、持ち運び可能なカバン型のポータブル蓄音器や、ラップ部分が



蓄音器 (三光堂グラフォフォン)

初期の蓄音器は写真のような平円盤式の蓄音器ではなく、円筒式の蝸管をメディアとしました。三光堂は円筒式蓄音器の輸入販売を手がける会社として発

売を手がける会社として発

足しました。その後、平円盤式の蓄音器とレコードが登場し、レコードの大量生産技術が確立します。欧米のメーカー各社が凌ぎを削り、性能を向上させていく中、日本でも蓄音器生産を行うため、明治四十二(一九〇九)年に日米蓄音器商會が設立されました。明治四十二(一九〇九)年には本格的に平円盤式蓄音器の生産が始まります。日米蓄音器商會の設立に関わった三光堂は、その後、自社でも蓄音器を生産します。このモデルは国内生産開始からわずか四年後に生産され、三十円から五十円ぐらいで販売されました。昭和三(一九二八)年に、全国に先駆けて岡山県が県税として蓄音機所有に課税します。その後、他県もそのアイデアを導入し、新潟県も昭和十二(一九一七)年から楽器税として蓄音機に課税します。税額は、蓄音器一台につき五十銭、電気蓄音機は三円の課税で、毎年支払うものでした。不景気の中、税収を少しでも上げるための方策に蓄音器も一端を担わされていたのです。

参考文献 梅田晴夫「蓄音機の歴史」(PARCO出版局、一九七九年九月) 倉田喜弘「日本レコード文化史」(岩波現代文庫、二〇〇六年〇月)

(藍野 かおり 学芸員)